第１回チームオール弘前ワークショップ

（2011 年 7 月 28 日（木）18 時 30 分－21 時　　於 弘前大学人文学部 4 階多目的ホール）

東日本大震災後、弘前市、弘前大学と NPO は、チームオール弘前として、野田村へ定期的に災害ボランティアバスを運行するなど、復興支援・交流活動に取り組んできました。日ごとに野田村の瓦礫撤去や店舗の営業再開が進み、状況は刻々と変化するなか、ボランティアに熱心に取り組まれている成田さんの発案で、第 1 回チームオール弘前ワークショップが持たれました。開催目的は、より良い支援・交流のためにボランティアに何ができるのかを問い直し、ボランティア活動の今後を考える場を持つことにありました。

当日は、平日の夕方にもかかわらず、災害ボランティア常連の市民と学生のほか、野田村に足を運んだことのない弘前大学人文学部の石堂学部長を含む教員や弘前市役所職員など、30 数名の参加がありました。山口先生が司会を務め、李先生の挨拶で開会しました。

まず、5 名または 7 名の 6 グループに分かれて、オープニングリラクゼーションとして災害カードゲームが行われました。このゲームは、阪神大震災後に考案されたもので、例えば、「あなたが被災地の屋外でボランティアリーダーを務めており、午後から大雨の天気予報が出ている場合に、ボランティア活動を続けますか、それとも撤収しますか」といった問いに、イエスかノーのカードを出して答え、自分の回答が多数派であれば座布団（のカード）をもらえ、自分の回答が 1 人だけの場合は金の座布団をもらえます。回答カードを出し合った後は、どうしてそのように判断したのかを話しあいます。カードで示された架空の状況に直面することで、どのように判断するかを自分の身をもって考え、他の人の考えに触れて自分の考えをとらえ直すとともに、あえて裏をかいて金の座布団をねらうゲーム的な側面もあり、参加者の間に若干あった緊張感が和らいでいったように映りました。

作道先生によるカードゲームの説明

ゲームで意外に盛り上がる

その後、「チームオール弘前の可能性と方向性を探る」をテーマとしたワークショップに移行しました。李先生によるボランティア活動の経過報告と成田さんの進行説明を受けて、「私たちにできること」を提案すべく、先ほどの各グループで、「今すぐできること」「時間をかければできること」「お金をかければできること」の別に、ポストイットに各自の提

案を記して模造紙に貼っていきました。アイデアを自由に出しあえるよう、互いの意見を批判しないことを条件にしました。各グループでは、学生、社会人と教員の老若男女それぞれのアイデアが貼り出され、互いの提案をめぐる意見交換が行われ、複数の提案の比較や衝突から新たなインスピレーションが湧き起こり、和気あいあいとした雰囲気のなか、模造紙がポストイットのカラーで染まっていきました。

ワークショップ風景

グループ別報告の内容は多岐に渡りました。以下は挙げられた提案の一部の抜粋です。

〇今すぐできること

・現地のニーズを調査して応える、瓦礫撤去や側溝泥上げ掃除のニーズはまだあると思う

・心のケア、話を聞いてあげる、記憶の記録、人の集まる場をつくり交流を活発化させる

・野田村に行った人は周りの人に見て経験したことをしゃべる、弘前市民に野田村を知ってもらう、野田村の豆腐や塩を広めて販売する、野田村の観光を潤わせる、義援金を募る

・子どもたちの自己実現と大学進学のために、託児、学習、送迎ボランティアを用意する

・花壇づくり、津波で流された木が多くあったので元に戻すため木を植える

・仮設住宅にいるおばあちゃんにメーキャップをして気持ちも若返ってもらう

〇時間をかければできること

・行政に働きかけて現実的な方針を示してもらう

・ニーズに応えられる専門家や組織等のコーディネートと村人とのつなぎ、制度情報提供

・村民の交流、集会場、銭湯の建設、野田村以外の被災地との連絡網（懇談会程度で可）

〇お金をかければできること

・道路・橋・港の整備、三陸鉄道の復活、元の町並みに戻す

・津波に強い町づくり、防波堤・防潮堤・防風林、避難ビル・シェルター、仮設住宅整備

・レンタカーの必要（格安で）、移動販売、巡回バス

・小規模融資の仕組み、義援金を運用するファンド作り、二重ローン問題解決、事業再建

・災害復興記念館、災害を忘れないようにモニュメントを設置する

報告風景

今回のブレインストーミングで、野田村を元の姿に戻すための解答がまとめられたわけではありませんが、野田村の復興に関心を持つ参加者が、支援・交流の方策を考え、相互に意見交換したことで、ボランティア活動の目的意識が明確になり、一体感を高める効果があったものと思われます。ボランティアのニーズは、応急手当てにあたる瓦礫撤去や物資仕分けから、住民の生活再建支援に向けた仮設住宅居住者などの見守りを含むソフト面や新たな町づくりに伴うハード面に移ることが予想され、ボランティアの関与方法も、週一回の大型バス派遣から小回りのきく支援などへ変更を迫られるかもしれません。被災住民のニーズに対応したボランティアのあり方の検討が、引き続き求められるところです。

ワークショップ終了後、数日かけてボランティア有志で制作が進められてきた「のんちゃん」（野田村のマスコット）ねぷたの運行に関する諸連絡と、ねぷた小屋での見学・お披露目会に移行しました。針金での骨組みから電気配線、紙貼り、色つけまでボランティアと協力者の手作りで、数日の突貫作業の割に可愛らしく完成後の高いねぷたになりました（その後、8 月 1、3、5 日のねぷた祭りで、大勢のボランティアの協力で成功裏に運行）。すでに 21 時を回っていましたが、成田さんを含む社会人有志は「かだれ横丁」へ流れて反省会（？）を行われた模様で、いつもながらのお元気さに脱帽させられるばかりでした。

「のんちゃん」ねぷた運行協力の呼びかけ

お披露目された「のんちゃん」ねぷた

（担当　飯考行）